

# 「ユダヤ人の起源」

シュロモー・サンド著、高橋 武智・佐々木 康之・木村 高子訳

「古事記」を例にとるまでもなく、一国の興りを著した歴史書は時代とともに色合いを変え、少数の権力者や知識人により新たな解釈が加えられてきた。これは大衆の意識や生活感覚と融和させ、治世するための常道だ。

この書は、いわばこの常識とも言える歴史形成に、敢えて古典的文献の検証という地道な方法でメスをふるった。作者をそこまで突き動かしたものは何か。研究対象がホロコースト(大量虐殺)を体験したユダヤ人であり、シオニズムという単一なアイデンティティーの強制により、現在も拡充が進むイスラエルとなれば領ける。

そもそも「国民」と「国家」のどちらが先に誕生したのか。第1章で作者が追求めたテーマだ。古代からの歴史性の中、民衆の主権と平等の希求は「国家」という枠組みを徐々に濃くしてきた。政治への参加意識を強く持つことは、当然その対象(枠)を明確に握むことだ。イスラエルの場合、個々の主体の根幹に旧約聖書の教えがあり、「選ばれし民」＝「民族」あるいは「種族」としての優位性を持たせることで、集団意識を強力にした。

が、果たしてそうか。本書は、第2章から本領を発揮する。ローマによるエルサレムの神殿破壊後、追放の記録等がないことから、ユダヤ人の多くは

## 新解釈で歴史の常識にメス

居残り、キリスト教やイスラム教へ改宗しながら生き続けたとする。つまり「離散」は存在せず、パレスチナアラブ人こそ、速きユダヤ人の先祖の可能性があるという論には驚かされる。

さらに紀元8世紀から13世紀、カスピ海から黒海沿岸に栄えたユダヤ教に改宗した国家、ハザール王国の存在も見逃せない。最終的に蒙古軍に敗れ消滅するが、その未裔がヨーロッパ地域のユダヤ人社会を形成したとする説は、「種」でなく、あくまで「宗教」的存在として繋がってきたユダヤ人像が浮き彫りになってくる。

いずれにせよこの書がイスラエルで初出版され、ベストセラーを続けたことは驚異だ。とかく負の側面が強調されがちなイスラエル社会のリベラルな面として記憶するに値するだろう。

評・宮本誠一(NPO法人夢屋プラネット代表)

浩気社・3990円

